C－70 茨城県の織物 －伝統織物－

茨城大教育　　徳蔵きみ

目的　茨城県の織物の中で伝統織物として特に日の重要無形文化財織物の結城つむぎ、県の特産物としての石下つむぎ、および古くから織りつがれて来た綿織物についてその成り立ちと現状とを分析し考察した。

方法　現地における聞き取り調査およびアンケートによる記入調査を用いた。

結果　古代常陸風土記によると結城つむぎは　太田市長幡部神社を中心に長幡部施としてはじまりその後、平安前期頃には常陸施となり、常陸地方の各地で織られるようになった。さらに平安後期には常陸つむぎとなり、その後結城つむぎと変名され、結城市を中心として今日までうけつがれて隆盛をほこっている。石下つむぎは綿織物がその起原であり、その後絹と綿の交織物でとくに絹糸に強撚加工した織物が斬新で当地市場の人気をさらった。しかし昭和31年頃より結城つむぎ、平つむぎが日の重要無形文化財織物に指定されるとその影響をうけて交織物はすたれ　高級物絹100%の平つむぎがその主力となっている。綿織物は庶民の衣料として室町以降各地で自機としておられていた、とくに結城地方の木綿は品質優良で有名であった。しかしこの地方はつむぎ織があらゆる点で優勢であったため消滅していった。下館地方に織られた晒木綿は江戸時代には各国に輸出されていた、しかしその後外国綿糸の輸入により棉花の栽培は振はず従って生産も低く昭和14～15年頃には1万5千反位になっていった、しかし太平洋戦争前までは各地で伝統がうけつがれていたが、現在では県下二業者のみとなった。以上伝統織物について報告する。